

開会のご挨拶

2019年（平成31年）3月15日

一般社団法人日本飼料用米振興協会

理事長	海老澤 恵子（中野区消費者団体連絡会）
副理事長	加藤 好一（生活クラブ事業連合生活協同組合連合会）
理事	木村 友二郎（木徳神糧株式会社）
理事	阿部 健太郎（昭和産業株式会社）
理事	遠藤 雄士（全国農業協同組合連合会）
理事	信岡 誠治（有識者／元東京農業大学農学部教授）
理事	谷井 勇二（有識者／元全農職員）
理事・事務局長	若狭 良治（NPO 未来舎）
監事	岩野 千草（中野区消費者団体連絡会）

一般社団法人日本飼料用米振興協会のシンポジウムにご参加いただきありがとうございます。

皆様には日頃から、日本飼料用米振興協会の活動にご理解とご協力をいただき、感謝いたしております。

2007年の輸入飼料の国際的高騰による畜産パニックをきっかけに、任意団体の「超多収穫米普及連絡会」としてスタートしてから今年で11年になります。

飼料用米普及のため、毎年シンポジウムを開催してきましたが、2014年4月に一般社団法人日本飼料用米振興協会として法人化し、その5回目のシンポジウムとなります。

回を重ねる中で、飼料用米をさらに普及させるにあたって、国の制度及び生産、流通、保管などについて沢山の課題があり、又それらの解決が容易でないこともわかってきました。様々な要因があることと思いますが、平成30年度の飼料用米作付け面積および生産量は前年よりも減少していると伺っています。その中で、課題を克服しながら意欲的に取り組んでいる生産者の方々が多くいらっしゃることはとてもうれしいことです。

昨年の秋、私共は、大分、福岡、山口の生産地を訪問し、大分では鈴木養鶏場の独自の取り組みを見学させていただきました。本日は、その鈴木養鶏場の鈴木会長より活動報告をしていただきます。

又、元東京農業大学教授の信岡誠治先生からは、飼料用米の新品種開発について研究報告をしていただきますが、いわゆるゲノム編集の研究・技術が急速に進んでおり、私共も大いに関心を持って注視していかなければならないことと思います。

また、本日は、農協や漁協、生協、森林組合などユネスコで歴史的な世界遺産に登録されました協同組合の連携強化を目指して組織されました一般社団法人日本協同組合連携機構の青竹様に講演をいただきますが、その中で国連が提起しましたSDGsのいわゆる持続可能な社会の構築について、私共の取り組んできた飼料用米を巡る耕畜連携の循環畜産、農業活動こそ、その目的に値するものと確信しております。

平成28年度から、農林水産省との共同事業として取り組んでおります「飼料用米多収日本一表彰事業」も、平成30年度で3回目になりました。

飼料用米をできるだけ低コストで多収穫できる生産を目指し、多収穫品種や耕畜連携で得られる有機肥料の使用促進と、そのための農業従事者の生産技術や成果で優れた実績を上げた個人や組織を表彰し、その成果を広く紹介、普及しようというものです。その表彰式も、「飼料用米活用畜産ブランド日本一」表彰とあわせて、本日の会場で行います。

わが国の米政策をめぐっては、昨年からの米の生産調整いわゆる減反政策が廃止され、その影響がどうなるのかとても関心の高いところです。

日本飼料用米振興協会としては、いろいろな方面からの問題提起や情報交換のできる場となることに努め、飼料用米による畜産が特別ではない当たり前のこととして普及するよう、行政もふくめてみんなで考えていきたいと思っております。

本日のシンポジウムが活動を前進させるために大いに意義あるものとなるよう期待しております。

尚、昨年秋に岐阜県から発生した豚コレラがいまだに収まっていません。

豚コレラの一刻も早い収束を願うばかりです。

本日は長時間の開催となりますが、どうか最後までよろしくお願いいたします。